

これ以上、どこへも動きたくないのだ。

顔を上げてなお、深い息をついた。わたしの周りにはどんな風も吹いてはいなかった。追い風も向かい風も。

その時、何の前触れもなかった。

特別な音も、特別な景色さえも。

ただ、気がついた時には空間が切り裂かれていたとしか言いようがない。

瞬きをする暇もないぐらいの刹那のことで、自分の脳が見た映像をきちんととどめていることが出来なかった。

「えいしょっと」

風変わりな服装をした女の子がどこでもないと、ところから転がり落ちるようになして飛び出してきたのだった。

血のような真っ赤なワンピースに白いブラウス。その上にくるぶしまでの長いマントを羽織っている。髪の色は燃えるような赤毛。サイドだけは肩ぐらいの長さなのに、ふるふると首を横に振ると、腰まである長い三つ編みがあかあかとした光を返して輝いた。

ちよっとコスプレめいた格好だと考えたのもつかの間、こちらを見つけたその子が声をかけてきた。耳ざわりな甲高い声。

「やあやあ、その一般さん。今は何年何月何日何時何分、地球が何回まわった時？」

「え、えーと」

わたしが突然の問いかけにうろたえていると、そのちっこい赤毛はつかつかと歩み寄ってきた。ぐっと手首を掴んでひねりあげてくる。

「痛っ！」

「ふーむ、二時四二分か。おやつにはいいけど、ちょっと約束の時間には早すぎたかしらね」

彼女はわたしの腕をぽいっと放り投げると、そっぽを向いてうーんと伸びをしている。詫びもない。腕をさすりながらわたしは呟いた。

「……その腕時計は三分五七秒遅れていますけどね」

「あらそう。ずいぶん細かいわね。どうして？」

「……別に。ちょっとそのままにしてるだけです」

わたしは本当の理由を答えなかった。倶楽部活動に遅刻する言い訳をごまかすためにわざと腕時計を遅らせているなんて、よその人に説明しても分かってはもらえまい。活動がない今でも、時計を直すのをためらっている理由なんて、もっと理解不能だろう。

「まあ、あと十五分ちよつとならここに路駐してても構わないでしょうね」

ぼんぼん、と傍らの丸っこい機械を叩く。

「……それ、何ですか」

わたしはまじまじとその物体を見つめた。いつの間にかそれが現れたのか、気づけなかった。

直径およそ四メートルほどの球体。見たことのない金属光沢。今さっき彼女が転がり降りてきたであろう出入り口が、既に消失していることに気がつく。微弱な電流を制御することで自己組織化する金属でも使われているのだろうか。最近の報道で取り扱われているのはまだ試作品レベルだったように思うのだけれど。

機械を見ていると理系の血が騒ぐ。理論系の専攻だとはいえ、やはり実機は言いしれぬ魅力を秘めている。

「これ？ コンパクトタイプの可能性空間移動船よ。そんなに珍しいものじゃないと思うけどなあ」  
彼女はそう言って小さく頬をかいた。

「可能性空間？ それって確か空間確率分布の……」

わたしにはひどくなじみの単語だった。超統一物理学専攻の退屈なカリキュラムの中で唯一愛することが出来た授業だった。担当教授の北白河先生の講義が本当に面白くて、他の授業では居眠りばかりのわたしも必死でノートを取っていたのだった。今日は休講だけれど。

「ああ、そっか。この世界だと超統一理論の成立が少し遅いんだった。ごめんごめん。その先の可能性空間の実装は君たちには少し早すぎたかもしれないわ」

「なんですって」

わたしは耳を疑った。わたしの理解を超えている概念が話せるなどただ者じゃない。久しぶりに

マニアックな会話になりそうでわくわくした。まともに比較物理学の討論が出来るなんて去年の冬に開かれた国際学会以来だ。

「……可能性空間なんて、まだアイデアとして提唱されているだけでしよう。実装だなんて冗談としか思えないわ。大体、観測物理学っていうのはもう行き詰まってるのに」

まず否定から入る。悪い癖だとは思う。だとしても、思考訓練としてのディベートは意見対立がなければ成り立たないのだ。

「大丈夫よ。これ以上この世界に影響するつもりはないから。待ち合わせさえどうにか成立すれば貴女の記憶ごと抹消される。心配するような干渉コンフリクトは起きない。これはただのすれ違い通信だと思つてちょうだい」

「だいたい、超統一理論の成立と言うけれど超弦理論を実験で確認することは現在の技術では不可能よ。プランク長のひもをどうやって再現するの」

「うーん。これはちよっと貴女にとって初歩的な指摘かもしれないけれど、世界は思ったとおりのものに変容するというのがうちの世界の最近の定説なのよね。ローマのヴェネツィアノ五世とクスコのアタワルパらによって同時に提唱された想像可能性幾何学の学説がよく引用されるけれど、オリジナルはホシヨートのトゥルバイフによるものではないか、というのが昨今の霊能史家の論争ね。先だってセドナの無機霊能場学会の百周年記念講演の質疑応答の場でエリック大先生が蜂の巣にあってるのが記憶に新しいわ。ただ彼らの学説には致命的な誤謬が一箇所だけあって、それに

よって帝国の威信はどうか危ういバランスを保っているというのがローマン派の史観。A A主義の立場だとそれはまた別の視点があるけれど、私の理論では言い換えに過ぎないから今日は割愛しましよ」

彼女は熱弁を振るつたが、ほとんどがわたしには聞き覚えのない固有名詞だった。というより、近い単語を述べているのに意味がひどく食い違っているような、そんな奇妙な感覚をおぼえる。一言で言うなら、意味は分からないのに、わくわくしていた。

「待つて。靈能史観と超統一物理学との間の相関については一昨年ミュンヘンで研究会が立ち上がったばかりよ。百周年記念だなんてそんなの冗談でしょう」

彼女の言葉に異議をささみながら、わたしは自分が彼女の言葉の一部をわざと聞き逃していたことに気が付いた。『この世界』という言葉。まるで別の世界から来たかのような物言い。それにマントを着た、あの奇妙な格好。わたしの世界の常識からはいささか外れている。

「うん、だから多分、この船は貴女の住むこの世界とは違う技術で作られているのよ」  
彼女はあつけらかんと答えた。わたしはどんな反応を返せばいいのか分からなかった。

異世界人。そんな単語をわたしは許容できるだろうか？ 最終的な結論については自分の理性と十分な時間をかけて対話する必要があるが、今すぐには難しそうだ。否定するにせよ肯定するにせよ、時間が必要だ。とにかく、頭を実務的なモードに切り替えるしかないだろう。それが、わたしのやり方というものだ。